

大事な「あれこれ帳」を取り戻せ

『トリストラム・シャンディ』の擬似草稿研究

内田 勝

1. 失われた「あれこれ帳」

ローレンス・スターン (Laurence Sterne) の贋自伝小説『トリストラム・シャンディ』(*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman, 1759–67*) は、トリストラム・シャンディという名の架空の男の自伝という設定で書かれているが、第7巻には、フランス旅行中の語り手トリストラムが、自伝執筆用のメモとして旅行中の雑感を書き留めた「あれこれ帳」(remarks)を紛失して大騒ぎする場面がある。ここでトリストラムが“remarks”と呼んでいるのは手帳 (pocket-book) のことと思われるが、彼はこの手帳を自分の馬車に置き忘れたまま、その馬車を中古馬車販売業者に売り払ってしまったのだ。トリストラムが失った「あれこれ帳」すなわち備忘録には、自伝の元となる気の利いた言葉や面白いエピソードが詰まっていた。彼は(おそらく作者スターンと同様に)、旅先でも持ち歩いてきた備忘録を元にして自らの伝記を執筆していたのだ。

実はトリストラムが参照したのは、自分自身が書いた「あれこれ帳」だけではない。18世紀イギリス文化史研究者のカレン・ハーヴィー (Karen Harvey) は、トリストラムが自伝を書くにあたって、シャンディ家に伝わるさまざまな手書き文書を参考にしている点に注目して、“The Manuscript History of *Tristram Shandy*.”という論文を書いている。たとえばトリストラムの父親であるウォルター・シャンディが遺した手帳、やはりウォルターが遺した「トリストラム」という名前に関する論考や『トリストラピーディア』という教育論、ウォルターが弟トウビーの演説を書き取った原稿、ウォルターと妻との結婚契約書、教区牧師の説教の原稿……。それらの手書き原稿はトリストラムの自伝の中でたびたび言及され、参照され、ときには数ページにわたって引用されている。彼は自分自身の思いつきや、ラブレーやセルバンテスといった過去の古典からの引用句だけでなく、シャンディ家に伝わるさまざまな手書き文書からの引用をも、備忘録としての自伝に書き込んでいった。

2. 備忘録とは何か

備忘録 (commonplace book) とは本来、さまざまな本からの重要な抜粋を項目別に集めた本のことである。備忘録においては、気になった文章を抜き書きするだけでなく、それらの抜粋を項目別に分類整理しておくことが肝要だった。抜粋された文章をより効率的に分類整理する方法を確立させたのは、哲学者のジョン・ロック (John Locke) であった。没後に刊行された「備忘録の新方法」(“A New Method of a Common-Place-Book,” 1706)の中でロックは、備忘録の冒頭に記載項目をアルファベット順に並べた索引を置く方法を提唱した。そうすれば備忘録のどのページにその項目の抜粋を書き込めばいいかも分かり、後で検索もしやすくなる。ロックの方式に基づいて備忘録を作ることは、18世紀初頭のイギリスで流行した (Havens 55)。また18世紀後半にも『ベルの備忘録』(*Bell's Common Place Book, 1770*)のように、ロックの方式に基づく索引ページ用のテンプレートが冒頭に付けられた空白の備忘録が刊行され、人気を博した (Benedict 47)。

スターンが学んだ時代の大学でも、聖職者を目指す学生には備忘録を作成することが奨励された。スターンが聖職者として書いた説教だけでなく、あらゆる作品について、備忘録に溜め込んだ種々の断章を織り合わせる形で作品を執筆したであろうことは、今では研究者の間で定説になっている。『トリストラム・シャンディ』の設定上の筆者である主人公トリストラムもまた、作者スターンと同じように、過去のさまざまなテキストを織り合わせることで備忘録としての自伝を執筆していると言えるだろう。ただしそれは、ジョン・ロック式に項目別に整理整頓された備忘録ではなく、どこが始まりでどこが終わりかもよく分からない多種多様な抜き書きが交錯し混乱する、鶴 [ぬえ] のような備忘録であった。

3. 親から子へと受け継がれる備忘録

そもそも17~18世紀の中流階級の人々が書き遺した備忘録は、必ずしもロックが提唱したような方法できちんと分類整理されて作られているわけではない。利用者が書き込んで作る『ベルの備忘録』にしても、ロックの方式に基づく索引ページ用のテンプレートが冒頭に付けられているにもかかわらず、実際にはかなり自由な使い方をされていた。Google ブックスで無料公開されている『ベルの備忘録』の一つの持ち主は、ロックの方式を早々に放棄して、詩や文章の断片のほか、ポマードの作り方や戯画までもを雑然と書き込んでいる。

17世紀から18世紀にかけてはこうした手書きの雑然とした備忘録がたくさん作られ、しばしば親から子へ

と世代をまたいで書き継がれていた。『トリストラム・シャンディ』の擬似草稿研究を行ったハーヴィーは、17世紀末から18世紀にかけて中流階級の男たちが書き遺した備忘録をいくつか紹介している。たとえば「クリストファー・タットヒルの備忘録」(*Commonplace Book of Christopher Tuthill*)は、1650年にイングランドで生まれ、商人としてアイルランドで活動した男の備忘録だが、1689年のウィリアムイト戦争でプロテスタントとして投獄された経験を語る記載のすぐ後に、鮭の酢漬けのレシピが挿入される乱雑ぶりだ。この備忘録のタットヒル家の歴史に関する部分は、1712年にクリストファーが死去した後も子孫によって書き継がれ、19世紀半ばの1858年まで延々と書き続けられた(Harvey 284)。家長となった男たちは、先祖が遺した多種多様な手書き文書を読み、参照しながら、家族の歴史を備忘録として書き遺し、子孫に伝えようとしたのだ。

トリストラム・シャンディの自伝は、まさにこうした意味で、トリストラムの本でありながらシャンディ家の物語にもなっている。シャンディ家の家長であるトリストラムは、父たちが遺した手書き文書を参照・引用しながら『トリストラム・シャンディ』という備忘録を書き遺し、シャンディ家の歴史を後世に伝えようとしているのだ。そう考えると、トリストラム・シャンディの自伝であるべき原稿のほとんどが、父親ウォルター(Walter)や叔父トウビー(Toby)の行状を伝える内容になっているのもうなずける。

4. 手書き本の構成原理で作られた印刷本

スターンは作家として有名になる以前の1758年に、娘のリディア(Lydia)に宛ててシャンディ家と彼自身の歴史をつづった文章を書いている。この回想録は、家族から聞いた話やスターン家の聖書に書き込まれた情報を元にまとめられたものだとされている(Harvey 288)。スターンもまた、クリストファー・タットヒルたちと同じく、過去の手書き文書を参照・引用しながら備忘録を書き遺し、家の歴史を子孫に伝えようとする、中流階級の男たちの一人だったのだ。

そうしたスターンが生み出したキャラクターである紳士トリストラム・シャンディは、備忘録としての自伝の手書き原稿『トリストラム・シャンディ』を書き続ける。その原稿には、トリストラムが出会ったさまざまな本や文書が引用・借用・盗用される一方、彼が思いつくまま書き連ねる原稿の中では、さまざまな過去の記憶がランダムな順序で語られるため、物語の中の時間は行ったり来たりして読者を混乱させる。こうした語り口は、直線的かつ論理的に語る事が理想とされる印刷本の常識と比べればかなり異質なもののだが、17~18世紀の手書き本では、こうした混沌とした語り方がごく普通に行われていた。

マーガレット・エゼル(Margaret Ezell)は、17世紀の手書き本を扱った論文の中で、ウェールズ国立図書館が所蔵する、ある複雑怪奇な手書き本(Powell, Vavasor, 1617-1670 Poetry, NLW MS 366A)を紹介している(Ezell 63-64)。巻頭の白紙にはアルファベットを練習した跡があり、2枚目の裏には少なくとも2人の別人の筆跡で、3つの異なる方向に文字が書かれている。性別も時代も異なる何人もの書き手が、同じ本にそれぞれ好きなように文章を書き込んだ結果、この本の中ではどれがイポテキスト(先行テキスト)でどれがイペルテキスト(後続テキスト)かも分からない何重ものパランプセスト(重ね書き羊皮紙)状態が現出している。まるで過激なポストモダン文学のような混乱ぶりだが、紙の再利用が奨励される手書き本においては普通に起こる現象だ。

そう考えると、過剰な脱線、前後し続ける時間、意図的に中断するテキストや空白のページ、他の本からの借用や引用で埋められていくページといった、『トリストラム・シャンディ』という本の実験性なりポストモダン性なりを示す特徴は、実は革新的な新しい技法であるどころか、古くからある手書き本の構成原理を印刷本に当てはめただけのものとも言えそうだ。『トリストラム・シャンディ』のテキストを、手書き備忘録の文章として捉え直すことは、この作品の本質について考えるうえで重要なヒントを与えてくれるだろう。

主要参考文献

- Benedict, Barbara M. *Making the Modern Reader: Cultural Mediation in Early Modern Literary Anthologies*. Princeton UP, 1996.
- Ezell, Margaret. "Invisible Books." *Producing the Eighteenth-Century Book: Writers and Publishers in England, 1650-1800*, edited by Laura L. Runge and Pat Rogers, U of Delaware P, 2009, pp. 53-69.
- Harvey, Karen. "The Manuscript History of *Tristram Shandy*." *The Review of English Studies*, new series, vol. 65, no. 269, April 2014, pp. 281-301.
- Havens, Earle. *Commonplace Books: A History of Manuscripts and Printed Books from Antiquity to the Twentieth Century*. Beinecke Rare Book and Manuscript Library, 2001.
- Sterne, Laurence. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*. 1759-67. Edited by Judith Hawley, Norton Critical Edition, W. W. Norton, 2019.